

11月1日現在	
人 口	7,394 (0)
男	3,651 (- 1)
女	3,743 (+ 1)
世帯数	1,692 (+ 1)

N県の高少年センターから声
 がかかって、順法闘争の中を夜
 行で四時間延着で行って来た。
 なぜ行く気になったかというこ
 と、大学生、高校生、勤労青年が入
 りまじって、それぞれグループ
 活動をつづけていたが、そうい
 うグループが合同して講演を聞
 きたいということになったと聞
 いたからである。延着はしたが
 夕刻の開会には間に合った。受
 付から開会をさすべて青年たち
 でやっていた。お客さんとして
 県の人々が数人みえていただけで

「青年を斬る」という演題が
 与えられていた。私は「やば
 やしている大学生ならかたっぱ
 しから斬ってやるが、君らのよ
 うに毎日黙々として働いている
 青年を斬ったら、あしたからメ
 シが食えなくなるので斬るのは
 やめた」と話を切り出して約二
 時間、例によってかつてなこと
 をしゃべらせてもらった。

講演がすんで世話役の青年男
 女約三十名との懇談会が夜の十

話のいとぐち

(月刊公民館より)

里村紹巴は、連歌の名人といわれましたが、彼の門下からは千利久や、松永貞徳などが輩出しています。

明智光秀がクーデターを決意し、本能寺の信長を襲う直前に愛宕山で連歌会を催しました。時は今天が下知る五月かなと発句したのを、同席していた紹巴がムホンを暗示するおだやかならぬ句と知りながら、信長公へ内通しなかったのはけしからん、と秀吉は紹巴を呼びつけました。「そちは明智のムホンを知っていたのだな」と詰問をうけた紹巴は、首を傾けて、「是

は今天が下知る――なるほど、ちとおだやかではございませんな

しかし、あのときの発句は、たしか、時は今、天が下なる五日りかな、であつたように覚えておりますが……」と、とげた口調で答えました。秀吉は、声を落

だて、「なんと申す。わしは、愛宕山へ奉納した連句の巻物をちゃんと見ているのだぞ」「二

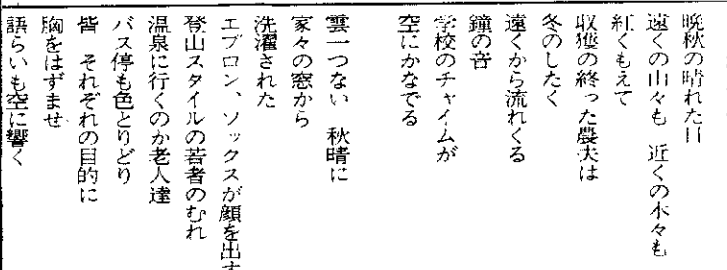
れはしたり、現に書記が天が下なる五月かな、と書きとめまし

たのを、この私もちゃんとこの目で見ております。同じ、字が

キケンせず投票しましょう

来たる十月二十五日は、中里村長選挙がおこなわれます。選挙はケンセツ、自からの判断により、自からの権利を行使いたしましょう。あなたの投票は、絶対他人にはわかりません。違反行為は絶対にさせないようしないように、立会演説会や個人演説会にできるだけ出席し、候補者のお話をよくきき、有権者の皆さん自からの自覚の上に、正しい選挙で私達の中里村がますます発展するよう、りっぱな代表を選びましょう。

◎投票所及び投票時間
 あなたの投票所で投票してください。投票時間は、原則として午前七時から午後六時までとっておりますが、次の投票所は閉鎖時刻を繰上げますので注意



○第七十投票所（大原冬期分館）
 一 原町、新里
 ○第十四投票所（清田山公民館）
 一 清田山

＝ 年末は小包
 小包は早目

年賀状より一足早くラッシッ
 を迎えるのが年末の贈答用小句
 です。

郵便局の窓口には、平常の月
 の約三倍もの小包が差し出さ
 小包の山ができます。

これらの小包をより早く正
 くお届けするため、次の点に注
 意をお願いします。

▼年末の小包は、十二月十五
 までに

年末がおしせまってから差
 出されますと、年賀状の処理

實状より一足早くラッシュも重なつて、年内配達が困

特にお歳暮などをデパートや商店に発送を依頼する場合には、早目に注文するようにしてください。

▼荷造りにも注意して
小包をつくるときには、じょうぶな包装紙やヒモで、荷造りをして、中身がとび出さないようにしてください。特に、贈答用小包として「サケ」など魚類や、くだものを送る場合には、

十二月五日、午後一時から越

十日町電報電話局になります。
 十二日五時午後二時前後は、
 切替作業中ですので不要の電話
 はできるだけご遠慮くださるよう
 うご協力をおねがい致します。

香典返しに 寄附

田中の滝沢幸一さんは、この
 ほど父・徳松さんの香典返しと
 して参子田を社会福祉事業に役
 立ててほしいと、村の社会福祉
 協議会に寄附されました。

ポリエチレンなどの袋に入れ、
 さらに新聞紙などでしっかりと
 包み、水分が外へ出ないように
 包装して下さい。

▼小包にも郵便番号を

現在、すべての郵便物につい
 て郵便番号で区分け作業を行な
 っております。小包も例外では
 ありません。止しくはつきりと
 記入してください。

また、あて名は、アパートの
 部屋番号や、〇〇様方などの
 の肩書きまで必ず書いてくださ
 い。

なお、荷札は二枚つけてくだ
 さい。

大泉 鉄打ち合うように北から冬ふゆがくる。

つくりするほどふえてきた。結構なことである。しかし不安もとまなう。行政にたづさわるおとなたちが青年達をせっからにひっぱらうとする危険があるからである。よけいなおせっかいはしないほうがよい。正直におつつかると自然相手の氣にころもわかるものだ。相手をあやつろうとすると、相手は逃げる夫婦も体当りで相手を知るのである。(月刊公民館より)

古の大腹中に飛び込んで芝居をうった結巴は、なみの連歌師ではなかつたようです。

◎産声

新婦	新郎	新婦	新郎	◎高砂	根津	樋口	井之川	田田	井之川	山田	氏名
丸山	滝沢	徳井	南雲	憲曉	良夫	徹	重紀子	勝弘	宣子	父の名	父の名
漬子	知一	増江	海	正平	好一	平八	洋一	正喜	孝雄	小原	部落名
三十日町	田代	堀内	本屋敷	芋川	干溝	山崎	干溝	干溝			

打ち合ひのように北から冬がく
ゆるもの一つにしてみれば
つも出直す鮮明さがあり秋の
五 隅野に赤萩の草のわた
梢陽
沈涼と素足の白い枯野かな
荻葉をかたむけてみし旅のはじ
まり
涼子
深雪
林さくら無惨に人の逝きしかな
新耶 桑原清一郎(三)重地
新婦 小林加代子(三)西方
新耶 桑原今朝治(四)東田屋
新婦 渡辺マエエ(五)川西町
新耶 吉楽 英一(七)上山山
新婦 山田 和代(五)清田山
〇昇天
氏名 年令 部落
高野 ナミ (七二) 芋泥 部落
太島 逸一 (六八) 東田屋
吉楽 サト (七八) 上山山
薄沢 操 (六七) 田中
坂城 篤 (六五) 芋泥
